

+

2021年

12月第1・2週の主日礼拝説教要約

・12月 5日：ルカ福音書 1：13-22.

「最後の祭司」

・12月12日：ルカ福音書 1：46-55.

「マリアの賛歌」

説教 《最後の祭司》

大いなる恐るべき主の日が来る前に、私は預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は父の心を子らに、子らの心を父に向けさせる。私が来て、この地を打ち、滅ぼし尽くすことがないように。

—— 聖書協会共同訳 旧約聖書 マラキ書 3:23-24.

エリヤが既に来ていたにもかかわらず人々が彼を認めず、好きなようにあしらってしまった。このことをイエスが語ると、弟子たちは直ちにその該当者が洗礼者のヨハネであることを悟りました。

そのヨハネの父親が、「アビヤ組の祭司のザカリヤ」であることが、ルカ福音書には明記されています。月当番の神殿祭司でした。初老の彼が息子を授かり、その息子が将来、荒れ野に出て、駱駝の毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べて生きる隠者の如き人物に育つことはまだ誰も知りません。勿論、その姿は神殿祭司とは程遠い佇まいとなります。

神の使いの天使は、生まれ来る息子の養育をこの祭司に命じます。彼の初老の妻は未婚のイエスの母の親戚でもあり、息子を産む張本人としての覚悟が必要となります。

想像を超えた突然のメッセージが特定の人間に届く時、その時こそ神が人類の歴史の中に、大きく介入する時なのです。その全貌を伝える困難な作業を、この福音書の著者だけが引き受けました。

来たるべき主の日に、「神が来て、この地を打ち、滅ぼし尽くす」ことを防ぐのが、祭司ザカリヤの息子の使命です。息子も将来、そのことをこの世に対し警告する時が来るでしょう。もし彼が、人々から認められずに好きなようにあしらわれたなら、その時神はどんなさるのでしょうか？ そうです、それが現実となる時代が、逼っています。彼も、また神も共に厳しい立場に立たされることになるでしょう。

旧約聖書の最後のマラキ書の預言(＝予言)は、良くも悪くも祭司ザカリヤの息子と神の独り子の生きる世界で開花するでしょう。

マラキの告げる、「大いなる恐るべき主の日」が、一体、何を意味しているのか？ その日は来ているのか？ 始まったのか？ それともまだなのか……？ 一部、不明な点はのこります。

2022年が明けます。困難な日々はこれからも続くのでしょうか？

説教 《 マリアの賛歌 》

祭司ザカリヤに現われた同じ天使(ガブリエル)が、今度はイエスの母となる乙女マリアの前にも現われます。絵画では、歴史的にマリアの地位が向上し、逆に天使の地位が相対的に低下するために両者の上下関係が逆転し、最終的にはマリアの前に天使がはべる図像となります。

さて、その天使がマリアに告げ知らせたことは、神の子供が、あなたの胎内に宿る、というものです。想像を絶するメッセージが特定の人間に天から届く時、その時こそが人類の歴史の中に神が大きく介入して来る時です。男性ならばヨナの如く逃げ出したくもなるような重責を、神は乙女に担わせるのです。あなたの胎はそのためのものだ。もう、訴訟も何も認められません。そんな人生があって良いのかダメなのか？ 神の強引さに押しまかれる憐れな乙女マリアでした。と思いきや、この人は、その申し出を、堂々と受けて立つ人でした。ヨハネの誕生のことで呻吟したザカリヤよりも、はるかに潔く、また逞しく、彼女は自分の身の上で起こりつつある変化を受け入れたのです。

マリアの賛歌は、通称マニフィカト(*Magnificat*)と呼ばれるもので、これはヴルガタ(*Vulgata*)＝ラテン語訳聖書のルカ福音書の1章46節以下の言葉(*Magnificat anima mea Dominum*)の頭からきています。有名な天使祝詞＝アヴェ・マルア(*Ave Maria*)も同じ章の28節と42節の言葉をもとにして作られています。

宗教改革を経たプロテスタントの教会では、教会音楽の中に出てくる歌詞として知られていますが、カトリック教会の信徒の信仰生活の中では、これらの聖句は繰り返し唱えられる祈りの中に出てきます。

西方教会で神の母(*Theotokos*)と定義された(紀元431年)マリアを讃える習慣は多くの芸術作品を生み出すモチーフともなります。ただ、神の母とはマリアの属性の説明でしたが、属性は実体とは不可分であるとするアリストテレスの思想の影響と、ラテン民族の熱烈なマリア信仰とが相俟って、マリアの神格化がどんどん進んでしまいます。不幸にして、これも教会分裂の火種の一つとなってしまいます。

プロテスタントの教会では、マリアを「イエスの母」と呼ぶのが一般的です。原始キリスト教会でも、彼女の神性に関する記述は皆無であり、また、そういう待遇を受けていた形跡もありません。彼女は、必要に応じて息子の生い立ちを語り伝える役目を担っていたようです。